日本初！〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

立教大学大学院 社会デザイン研究科

Social Designer

vol. 37

新刊紹介

本研究科編『社会デザイン学 ― 持続可能な共生社会のために』（春風社）が出版されました

社会デザイン研究科は、2002年の発足以来（※2023年までは「21世紀社会デザイン研究科」）、本年で23年目を迎えました。このたび創立20周年記念事業の一環として、研究科教員による社会デザイン学の入門・選門（＝専門を選ぶ）書、『社会デザイン学――持続可能な共生社会のために』（春風社、2025年）を刊行、7月26日には、太刀川記念館にて出版記念シンポジウムを開催、大変多くの皆さんにご参加いただきました。

本書は、社会デザイン研究科の附置機関である社会デザイン研究所と連携して企画・編集したもので、社会デザイン学の基本的な考え方から専門的な視点までを網羅しています。

現在社会デザイン学を学んでいる方、これから学ぼうと考えている方々にとって格好の書です。ぜひご一読ください。

立教大学大学院
社会デザイン研究科（編）
税込価格：2,420円
発行日：2025年7月31日
出版社：春風社
サイズ A5判／ページ数 188p

【目次】

はしがき

● 第1部 社会組織理論
第1章 「社会デザイン」と「ソーシャル・デザイン」のあわい―デザイン行為の主体と客体を中心とした一考察〔大熊 玄〕
第2章 親密圏の社会デザイン―「個人化」した人間関係を編み上げる〔中森 弘樹〕
第3章 持続可能な社会へ―資本主義のリデザインは喫緊の課題〔河口 眞理子〕
第4章 社会デザインとしての公共政策―政策形成への市民参加のためにいかなる工夫が求められるか〔亀井 善太郎〕

● 第2部 コミュニティデザイン学
第5章 ジェンダーと社会デザイン―包摂的な社会の構築に向けて〔倉本 由紀子〕
第6章 嘘を飼い慣らす―社会を読み変える力〔品治 佑吉：元本研究科助教〕
第7章 福祉の進化をもたらす社会デザインへの期待―私たちの福祉の進化をあきらめない〔三浦 建太郎：本研究科客員教授〕
第8章 経済学と人間学の狭間で―「イノベーションの父」が見ていた 人と社会の逆説〔丸山 俊一〕

● 第3部 グローバル・リスクガバナンス
第9章 環境とひとと社会のデザイン―一筋縄ではいかないガバナンスをよりよくするために〔滝口 直樹〕
第10章 社会デザインとリスクガバナンス―自然災害のリスクとレジリエンスの視点から〔長坂 俊成〕
第11章 紛争と平和から考える社会デザイン―ガルトゥングの平和研究を手掛かりに〔長 有紀枝〕

● 特別寄稿
第12章 社会デザイン学の挑戦―人権意識に裏付けられた真に共生的な社会の創成のために〔北山 晴一：本学名誉教授・元本研究科教授〕

学問は社会を変えられるか？
―臨床社会学からの挑戦

西井 開（にしい かい） 先生

立教大学大学院社会デザイン研究科特任准教授。一般社団法人UNLEARN理事。専門は臨床社会学、男性・マジョリティ研究。臨床心理士。男性を対象とした臨床実践に携わりながら、ミクロな視点からジェンダー問題に取り組む。現在のテーマはDV加害者臨床。著書に『「非モテ」からはじめる男性学』（集英社）がある。

中森 弘樹（なかもり ひろき） 先生

立教大学文学部・社会デザイン研究科准教授。社会学の視座から、失踪をはじめとした親密圏の社会問題・社会現象を研究している。主な著作に『失踪の社会学――親密性と責任をめぐる試論』（慶應義塾大学出版会、2017年）、『死にたいとつぶやく――座間9人殺害事件と親密圏の社会学』（慶應義塾大学出版会、2022年）がある。

【臨床社会学のまなざし】

中森　今日はよろしくお願いします。まずは、西井先生が4月に着任されてから4カ月が経ち春学期が終了しました。社会デザイン研究科に関する現時点での印象や感想などを伺いたいと思います。さらに、本研究科に対して期待していることなど、ご自由にお話しいただければと思います。

西井　率直な感想としては、皆さん、非常に多彩な研究テーマを設定しながら、研究しているという印象です。個別的な歴史をつむぐようなライフヒストリーインタビュー調査をしている人もいれば、企業への投資の傾向性を研究する人もいます。最初に多角的に研究テーマを設定しながら、さまざまな面から社会をどのように考えるのか、どのように再構成するのかを考えることができる研究科だと実感しました。

中森　社会という言葉が出ましたが、先生ご自身がオフィシャルに名乗るときは、専門は心理学ですか、それとも、社会学ですか。

西井　臨床社会学と名乗るようにしています。

中森　臨床社会学なんですね。臨床社会学について説明してもらえますか。また、臨床社会学の視点から、多彩な研究テーマを持つ学生に対し、どのような指導をされている、または、これからされようとしていますか。

西井　はい、臨床社会学は、個人の生きづらさや困難など、臨床的な領域と社会学理論を架橋するような学問分野です。研究者によって細かな定義は違っていて、カウンセリングや自助グループなど、臨床的なことをやっている現場に参与し、社会学的に分析することを臨床社会学と言う人もいますが、私は別の形で捉えています。一つ目のステップとして、個人の心理や情動、信念、認知といった、いわばミクロな領域で生じるものを捉え、ジェンダーや経済格差など、社会構造の問題との関連性を踏まえて分析していきます。二つ目のステップとして、一つ目のステップで明らかになったことを踏まえて、既に存在している社会資源や臨床実践、制度設計を組み換えていく。いわば当事者の経験を深いレベルで把握した上で新たな社会実装を考えていくことが臨床社会学だと捉えています。これらのうち、社会実装の部分が社会デザインとかなり密接に関係しそうだと思っています。指導については、今はまだ手探りでやっているところです。社会学であれば、ある種の社会現象を社会学的視点を通じて、どのようなプロセスでその現象が起こっているのかを分析していくのが中心的な課題ですが、社会デザインや社

会実装となると、それを体系化させていく枠組みが既存の学術領域の中ではまだ少ない状況です。自分の中でも、まだ十分に見通しが立っていないというのが率直なところで、これから蓄積させていきたいと思っています。

中森　ところで、先生が研究者になったきっかけを教えてください。

西井　私は、もともと会社員でしたが、1年勤めて資本主義的なものに体がなじまないことに気付きました。学生のときに東日本大震災が起こり、ボランティアで東北に行っていたこともあり、もう一度東北に関わりたいと思って、宮城県に移住しました。貧困家庭の子どもを支援するNPO法人で働いていたのですが、そこでジェンダーの問題にぶつかりました。シングルマザーの貧困問題や、パートナーの男性からのDV、子どもに対する虐待問題があったので、真剣に考えなければいけないと思って勉強したのです。

勉強をしていく中で、ジェンダーやDVという問題を、シスジェンダー（割り当てられた性と自認する性が一致している）・ヘテロセクシュアル（異性愛）の男性たちがあまり関心を持っていないことが見えてきました。これは不思議なことだと思いました。ジェンダーに関わる問題は、やはりマジョリティである男性たちがコミットしなければ解決できません。どのようにすれば彼らにアプローチできるのかを考えるようになりました。

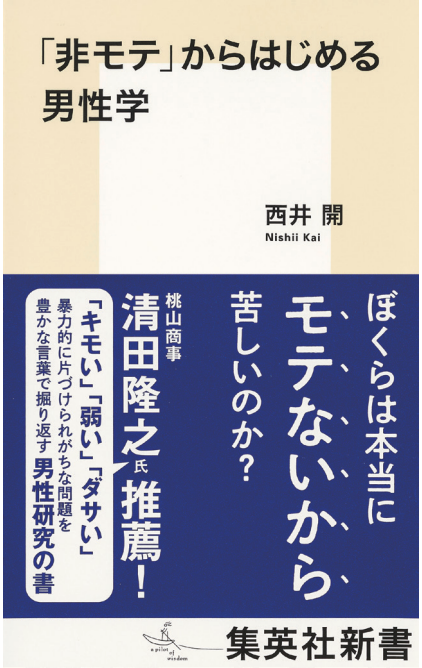
その後、立命館大学大学院修士課程に進学して、臨床心理学や臨床社会学を専門的に学び、臨床心理士の資格を取得しました。

中森　その後にもう一度、例えばNPO法人や現場に戻って、臨床社会学および臨床社会学の知見を使いながら、直接臨床に戻る選択肢もあったはずですが、さらに研究を進めるために博士課程に進まれたのですね。

西井　はい、そうです。修士課程での研究活動が思いのほか面白かったので、しっかり論文を書いてみたいと思い博士課程に進学しました。今まで明らかになっていなかったものに、言葉によって輪郭が与えられていくプロセスに、自分が関わることができて、とても面白かったんですね。特にジェンダーや差別に関する研究は、女性やマイノリティが研究対象になることが多く、マジョリティが対象になることはほとんどありませんでした。普遍的に存在しているはずなのに、未知のままになっている。その世界が明らかになっていく喜びがあったんだと思います。

中森　先生は2021年に『「非モテ」からはじめる男性学』（集英社新書）を書かれましたね。先生は「非モテ」をテーマにしていて、「非モテ人」にたどり着いています。つまり、恋愛においてうまくいかないことに悩んでいる男性にフォーカスするようになったわけですが、その「非モテ人」にたどり着くまでのプロセスはどのようなものだったのでしょうか。

西井　先ほど、いかに男性がジェンダーの問題に関心を持つのか、という話をしましたが、その課題を乗り越えるために、2016年頃に男性たちが「男らしさ」について語り合う対話グループを主催していました。それはそれでとても充実していたのですが、思想的な話が中心で、具体的な経験や感情を語るところまでいかないという感覚がありました。男性が男性であるがゆえに抱える課題や困難を明らかにする男性学という研究領域がありますが、男性学でも、男性はなかなか自身の内面性を語らないということが言われています。ところが、ネットを見れば「非モテ」という言葉を媒介にして、男たちが自身の劣等感や恋愛の失敗をすごく多弁に語っている現象がありました。そこで、もしかしたら「非モテ」というワードをフックにすれば、男性たちの経験を明らかにすることができるのではないかと着想したんです。



中森　その着想の成果の結実がこの著書なのだと思います。そして、それは商業的にもすごく成功した一冊だと記憶していますが、それによって社会の反応はいかがでしたか。

西井　「非モテ」男性の研究では、彼らが学校などのコミュニティの中でからかいやいじめを受けて周縁化され、その苦境を脱するために女性と交際することに執着するようになる、そのプロセスを描きました。読んでくれた方々のほとんどは当事者性を持っている男性たちだったのですが、自分の経験を思い出して胸が締め付けられるようだった、というレビューが多くありました。それはある意味で私の狙い通りでした。昨今、フェミニズムへの反動という文脈で、自分の生きづらさは女性のせいでもたらされている、という言説を目にすることが増えてきました。それは時に恋愛の文脈と絡み合い、自分が辛い状況に置かれている

のは女性が相手にしてくれないのが悪い、という安易な結論に行き着くことがあります。そうした言説に対して、私は一石を投じたかったんです。本当に僕たちの痛みは恋愛の失敗によってだけもたらされているのか、本当に女性が悪いのか、ということを問い直したかったんです。それがある程度成功したと感じています。学術的なインパクトとしては、男性学への関心を広げたことでしょうか。手前みそですが、男性学に関心があるという若手の研究者の方達が、かなり私の本を読んでくれていたんです。

中森　私も読みました。社会への影響といっても、社会自体は巨大なものなので、西井先生も答えづらい部分もあったと思います。もちろん、社会への影響もありましたが、それ以上に見えやすいのは学問の世界への影響です。私たちは日本社会病理学会に入っていますが、ある種の男性学に関わるようなテーマを発表する人が、西井先生の著書以降、明らかに増えたと思っています。学問の世界は狭い世界なので、インパクトが分かりやすく見えたと思います。

【本を読むことの重要性】

中森　ここまでは西井先生のご専門について伺ってきましたが、本日はもう一つ先生に質問したいことがあります。先生は、自分の専門ではないことを含めていろいろな取材や依頼を受けることがあるそうですが、それはなぜだと思いますか。私が思うに、先生はたくさんの本を読んでいて、さらには、先生自身が多彩なことについて語ることができる、アウトプットできる能力があるからなのだと思うのですが。

西井　確かに本を出してから様々な依頼を受けることが増えました。おそらく「取材内容に箔をつけるために専門家の意見を聞きたい」と考えている記者の人もいて、私の専門とずれる内容のことを取材されることもあります。率直に言うと、社会的に評価されるのは嬉しいので、次々くる取材や依頼を受けたくなる自分がいます。しかし、あまりそうした仕事をしていると、自分が安売りされていくというか、自分がやっていることの中身が薄くなっていくみたいな感覚がありました。これは駄目だと思って、自分が納得して語れるもの以外は断るようになりました。

アウトプットができることに関しては、どちらかと言うと当事者の声をたくさん聞いてきたから、というほうが正確かもしれません。私は、実は本をあまり読まない人間なのです。本を読むのが苦手なタイプで、おそらく一番量を読んだのは大学院のときだと思います。授業でこの本を読んでくるようにと言われることで、ようやく読み進めることができた。ある種の強制性によって、多くの理論や言葉に出会うことができたと思います。

中森　大学院に在学中にたくさん本を読まれたのは必要性があったからなのですね。図らずもこのような話になりますが、やはり授業は大事です。

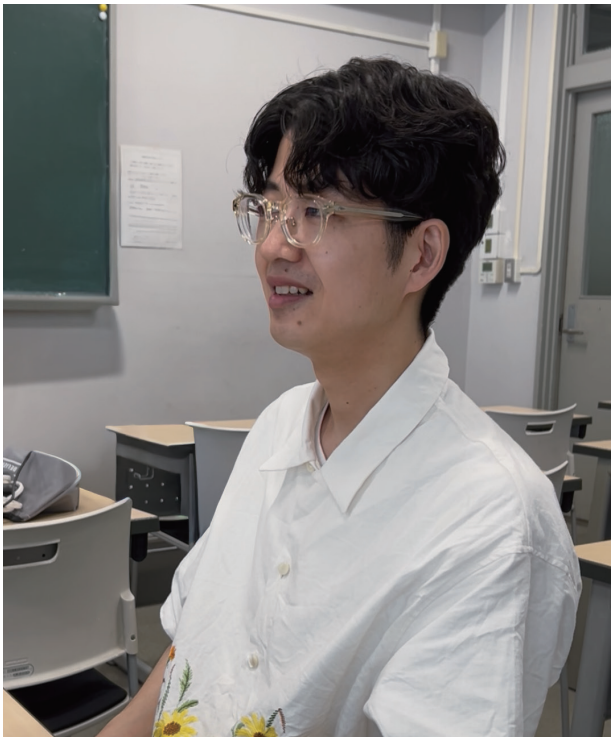
西井　大事ですね。先ほど当事者の声を聞いてきた、という話をしましたが、その声は時にか細く、聞き届けるための特有のアンテナや、声を受け止めるための認識枠組みが必要です。それらのアンテナや枠組みは、先人の知識を得ることでしか育まれません。あらかじめ「こういう現実がありうる」ということを知っておかなければ、当事者の声は聞こえないのです。だからこそ、学生たちには授業を「先人の知を得るための場」として使ってほしいですね。

中森　さて、最後に、本研究科の授業やゼミについてお話をしたいと思います。

この研究科の学生は授業がとても好きです。授業を楽しみにしている学生が多いです。しかしながら、授業で説明できることには限界があります。あくまでも、授業は導入だと思ってもらい、そこから得た言葉や考え方についてもっと調べた上で、レポートを書いて修士論文につなげていってもらいたいのです。私は、大学院としてはそのようなプロセスがあるべき姿だと思っています。ゼミについては先生方の中でたまに合同ゼミを行う先生もいらっしゃいます。効果としては、本研究科には、社会組織理論分野とコミュニティデザイン学分野、グローバル・リスクガバナンス分野の3分野がありますが、専門分野の異なる主指導以外の先生からのコメントをもらうことによって学生への良い影響が多分にあると思っています。機会があれば、いつか西井先生とゼミができればと思います。

西井　そうなんですね。私の方こそぜひよろしくお願いします。

中森　本日はありがとうございました。

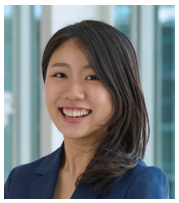


中村 陽太（なかむら ようた）さん

大阪府枚方市出身。立教大学観光学部観光学科卒業後、本研究科に進学。訪日外国人観光客の災害時のリスクについて研究している。博士前期課程2年。倉本ゼミ所属。

研究科での学びと生活

学部時代は観光学部で観光について学び、ワーケーションの研究をしていました。研究を進めるなかで長期滞在の観光客、特に日本国内に生活の基盤を持たない訪日外国人観光客に対する災害時の対応に関心を持ち、社会学やリスクの分野で研究を行える大学院への進学を目指すようになりました。観光客への災害時対応については、受け入れる側、訪問する側の双方にとって重要な課題であると考えています。現在は、行政・民間事業者・官民における災害時の対応指針と運用の実態を整理し、リスクガバナンスの観点から研究を進めています。研究を進めるうえで研究科に在籍する様々な先生方からご助言をいただくことができ、社会人経験のある院生も多く在籍しているため、多様な観点からの意見や議論に触れられるという点が研究科の特色であると感じています。生活面でも色々なロールモデルに触れられるため、選択肢の幅が広がりました。講義は夕方以降が中心のため日中は研究のほか、他研究科や学部の講義を履修したり、学芸員課程や理学部の実施しているサイエンスコミュニケーションのプログラムに参加しています。引き続き研究を深め、充実した大学院生活を過ごしていきたいと思います。



山下 楓美香（やました ふみか）さん

新卒で航空会社勤務後、インドを旅しバイク事故に遭い重傷を負う。事故により人生のあり方を見直し学び直すことを決意。出願資格審査を経て本研究科に進学。引揚げ者である祖母の故郷観について研究を行う。博士前期課程2年、長ゼミ所属。

窮屈さの正体は私自身

航空会社に勤務したことがきっかけで旅に夢中になりました。インドをバイクで旅をしていた際に事故で重傷を負ったのですが、生死の瀬戸際に立ち初めて自分の命の使い道について立ち止まって考えてみました。そして私は「思う存分自身の能力を伸ばし、気の済むまでそれを発揮してみよう」と思いました。もともと色々な事に挑戦する性格ではあったのですが、できる行動への能力的・社会的な制限に窮屈さをいつも感じていて、その窮屈さとは何なのか正体を知り自身を解放してみたいと考えたのです。それから数年後に入学したのですが、私は研究テーマが決まるのが遅く約半年ほどかかりました。後から気づきましたが、入学当初は、社会デザイン研究科という名前に見合ういわゆる「社会の役に立つ」ようなテーマばかり無意識に探していて自分の本当に興味のあることを探すことができていませんでした。しかし研究科で学ぶうちに自分で自分を縛り窮屈な思考に陥っていたことに気がつき、現在の「ほとんど何の役にも立たない」であろう研究テーマに辿り着きました。研究科での多彩な学びを通じて、自分が以前感じていた窮屈さは自分が作り出していたもので、実は世界はもっと広いのだと感じるようになり自身が解放されていくのを感じています。

猪俣 みちよ（いのまた）さん

外資系企業で広報業務に従事した後、定年退社。リベラルアーツを学び直すために立教セカンドステージ大学を経て、本研究科に進学。地域に根付いた日本型エコミュージアムを研究中。博士前期課程2年。大熊ゼミ所属。

社会課題を見つめ直す視点

これまで、企業のCSR活動や社員ボランティアの企画に携わった中で、企業が社会の一員として環境保護や地域コミュニティとの連携を通じて持続可能な社会の実現に貢献できる姿を目にしてきました。今振り返ると、企業の目線はしばしば、社会的に顕在化した「大きな声」や広く共有された課題に向けられがちであり、地域に固有の、より繊細な問題には手が届きにくい現実もあったと感じています。本研究科で多様な分野を横断的に学ぶ中で、真に解決すべき課題とは何か、そしてそれを見極めるためには、どのような視点で社会を捉えるべきかを問い直すようになりました。

入学時に学んだのは、社会デザイン学が目指す思考と実践のあり方です。学問的基盤を固めた上で、全体を俯瞰する「鳥の目」と、人びとの営みを重視し、具体的課題にアプローチする「虫の目」の双方を育むことが、課題解決へのフレームワークを構築する上で重要であることです。国際的な紛争や急激な社会変化、そしてAIの実装により既存の価値観が大きく揺らぐ現代において、こうしたフレームワークを身につけることは、持続可能で包摂的な共生社会を築くために不可欠な学びであると確信しています。日々、教授や多様な仲間から受ける刺激は研究への支えとなり、研究に取り組むこと自体が喜びとなっています。

諸我 忠明（もろが ただあき）さん

東洋大学文学部史学科卒業。在学中よりチリ領イースター島の遺跡修復プロジェクトに参加。外資系メーカー、大手芸能プロダクション等を経て、現在は全国で保育所等を運営するどろんこ会グループでインクルーシブ保育の推進に注力。博士前期課程２年、長坂ゼミ所属。

全てを問い直し続ける所作

保育業界における一斉保育や障害児の分離など、古い慣習や制度と対峙するなかで、業界に閉じた価値観や思考そのものが、課題を再生産し続けていると感じていました。解決の糸口は、その内部にとどまることなく、一度距離を置いて社会全体を見渡す視点を持つことにある――そんな考えから、この研究科に進学しました。

在籍して1年半、SDGsや紛争解決、福祉、政策、哲学、メディア論、リスク学など多様な講義を通じ、一見ばらばらに見えた学びが次第に通底し、重なり合っていくのを実感しています。得られるのは、社会がどんな価値観や構造によりデザインされているのかを読み解く視点であり、それを問い直す力です。これは特定の専門分野に閉じない本研究科だからこそ可能な学びであり、領域横断的に物事をとらえる思考を養えることが何よりの特徴です。また、四季折々の美しさを見せるキャンパスで、普通に生活していたらなかなか出会うことのできない先生方や学生仲間との対話は、本当にかけがえのない時間です。

社会課題の解決に「正解」はありません。だからこそ、問い続ける態度そのものが、新しい視点やヒントを与えてくれると感じています。同じように現状に違和感を覚え、自分を問い直したいと思っている方には、ぜひおすすめしたい学びの場です。

あわいの人になりたい、わたし

2025年3月修了

芦沢 茂喜（あしざわ しげき）さん

ソーシャルワーカー（精神保健福祉士、社会福祉士）。精神科病院での勤務などを経て、現在は山梨県の福祉職として勤務。ひきこもり支援に取り組み、テレビなどのメディアに出演。実践をまとめた書籍も発刊している。

異動に伴い担当になった、ひきこもり。3年間、担当し、その経験をまとめ、本として発刊したところ、新聞、テレビなどに取り上げられ、10年以上経過した今でも、ひきこもり支援に取り組んでいます。ここ数年は求められるニーズが仕事の範疇を質、量ともに越えてしまい、プライベートな取り組みを始めました。2年前に自家用のワゴン車を購入し、後部座席を相談室に改造し、公園などの駐車場に出向き、話を聴く取り組み「つむぎ」を始めました。コロナ禍で顕在化し、増加する女性のひきこもりの相談を同居の家族から受ける中で、男性との違い、年代の違いなどを感じ、当事者から話を聴く必要があると感じましたが、なかなかアプローチできない状況下で浮かんだアイディアを形にしました。

買い物は何を買うのかを考える時は楽しく、買ったあとは気持ちが萎むものですが、私も勢いで車を購入したため、いざ車が来ると実践をまとめる自信がなくなり、逃げ出したくなりました。そんな自分自身を縛るために、大学院への進学を決めました。大学院であれば、他の大学院でも良いのに、なぜ立教大学の、社会デザイン研究科なのかと言えば、私が行っていることを特定の分野からまとめることは難しいと思いました。専門分野を深めるのではなく、広く学び、これまで取り上げられることがなかったことにスポットを当て、それを社会に訴え、新たな社会の姿を想像する、そんな本研究科の姿勢が私には合っていると思いました。2年間の学びを終え、私はこれまで以上にあわいの人になりたいという気持ちを強く意識するようになりました。あわいとは間。人と人との間、物事の同士の間。社会で起こる課題は様々な要素の関連、つながりの中で起こっていると考えた場合、間にこそ、大事なことがあるように感じます。あわいに関心を持ち、取り組む人が増えることが、社会が抱える課題解決に繋がるような気がしており、本研究科の学びを通して、より多くの人にあわいについて考える機会を持ってほしい。今の私はそう思います。

人生のターニングポイントに

2023年3月修了

藤岡 慶子（ふじおか けいこ）さん

大阪府堺市出身。大阪大学工学部建築工学科卒業後、建設会社入社。数多くの建築・まちづくり事業に従事。2023年3月本研究科修了。同年4月大阪市都島区長就任。

私が研究科と出会ったのは、新型コロナが蔓延した頃。ふと立ち止まる時間が出来た時に、日経ビジネスと立教大学の夏期集中講座を受講し、新鮮な学びを経験したことが契機となりました。

幼少の頃から、人と生活空間の関わりに関心がありました。高度経済成長期で自宅周辺の畑に建物が建ち、まちがつくられていく様相の変化に刺激を受け、大学で建築学を学びました。卒業時は、女性に開かれた就職先は少なかったですが、その後の男女雇用機会均等法の施行により、仕事を続け企業の定年まで勤め終えたところで、ふと気がついたのは、組織内の調整や企業利益に振り回されて、人と関わる場面が少なくなっていること。そして、様々な社会課題がとても気になり出しました。

河口先生のもとで、私の研究題目は「持続可能な社会活動を支えるための組織とネットワークのあり方　――サステナブルな事業に貢献する『女性の視点』を活かした組織特性――」でした。これまでの実務や社外活動の経験を基に、女性が意思決定に参画する事業の事例を捉え、その組織運営の特徴について社会調査をもとに仮説検証する研究を行いました。同時に、第一線で実践的に活躍されている講師のみなさま、また社会課題に取組むNPO やソーシャル・ビジネスの主宰者、起業予定者など多くの学友とも、学びを深めることができました。

現在は大阪市の区長になり、これまでの社会人としての経験と、研究科で“新しい市民的知の集結と協働のネットワークのあり方”を研究した経験を活かし、公民連携する協働を活性化し、まちづくりとひとづくりの課題解決と価値創造の両面を、区民に近い存在として推進していくという想いを胸に、日々奮闘しています。また、共に生きがいや働きがいのある組織環境を創出することに取組んでいます。

今あらためて、人生のターニングポイントに気づいて行動を始めるのはいつでも大丈夫で、大切なことを見失わずにしていきたいと思います。そのために欠かせない学びを、研究科で得られたことに感謝しています。

2025年2月22日(土)

会場 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム
主催 立教大学大学院社会デザイン研究科・社会デザイン研究所

01 公開講演会「ソーシャルメディアの社会デザイン～選挙と災害の事例～」

本研究科の長坂俊成教授(リスク学・防災危機管理学)がコーディネーターとして、以下の4名のパネリストを迎え、災害と選挙に関するフェイクニュースにフォーカスして、SNS等のソーシャルメディアの利用ルールの在り方や、プラットフォーム事業者の責任、ファクトチェック団体の役割、マスメディア等による偽・誤情報の事中対策、市民のメディアリテラシーなどについて、具体的な事例に即して、その発生や拡散のメカニズムや法的・社会的対策について討論した。(長坂 俊成)

[パネリスト]
古田大輔:日本ファクトチェックセンター編集長、ジャーナリスト
宮本聖二:日本ファクトチェックセンター副編集長、
本学大学院社会デザイン研究科客員教授
籔内潤也:NHK報道局機動展開プロジェクトニュースデスク
吉田弘毅:総務省情報流通行政局情報流通振興課企画官

2025年6月1日(日)

会場 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム
主催 ソーシャルデザインフェス実行委員会
後援 立教大学大学院社会デザイン研究科・社会デザイン研究所、一般社団法人社会デザイン・ビジネスラボ

02 ソーシャルデザイン・フェス2025「おせっかいのすすめ ～ みんなに役割がある社会のつくり方 ～」

本研究科修了生の有志たちが実行委員会を担う「ソーシャルデザイン・フェス」が今年も開催された。ゲストは、池袋東口グリーン大通りをメイン会場にくつろげる空間作りをしている宮田サラさんと、多機能型居宅介護サービス事業から多世代型アパートへ展開している加藤忠相さん。ゲストによる講演後は、参加者同士、少人数グループでの対話を行い、さらにコーディネーターの中村陽一本学名誉教授を交えた全体ディスカッションを経ることで、人と社会が重なり合う場(あわい)の持つ意味について探求した。(中森弘樹)

2025年6月6日(金)

会場 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム
主催 立教大学大学院社会デザイン研究科・社会デザイン研究所
共催 AAR Japan[難民を助ける会]、地雷廃絶日本キャンペーン(JCBL)、ヒューマン・ライツ・ウォッチ(HRW)

03 シンポジウム「岐路に立つ対人地雷禁止条約:いま世界で何が起きているのか」

1997年12月に署名式が行われ、1999年3月に発効した「対人地雷の使用、貯蔵、生産及び移譲の禁止並びに廃棄に関する条約」が大きな危機に瀕している。安全保障を理由に脱退を表明する国が出現、トランプ政権の登場で世界最大の地雷対策の支援国であった米国の資金が失われつつある。そのような中で開催された本シンポジウムでは、中満泉国連事務次長・軍縮担当上級代表によるビデオメッセージに続き、国連広報センターの根本かおる所長、土井香苗HRW日本代表、清水俊弘JCBL代表理事、西山秀平赤十字国際委員会(ICRC)駐日代表部法律顧問、福岡秋文・外務省軍縮不拡散・科学部通常兵器室課長補佐、紺野誠二AAR地雷対策担当が登壇、長が司会をつとめ、ロシアのウクライナ侵攻以降、条約締約国の間で離脱の動きが見られる危機的状況に、本年の条約の締約国会議の議長国を務める日本政府や市民社会の役割について論じた。(長 有紀枝)

The MSDA News

MSDA とは Master of Social Development and Administration の略称で、社会デザイン研究科に設置されている英語コースです。詳しくは HP をご覧ください。https://msda.rikkyo.ac.jp/

Report on the First MSDA Reunion

On Sunday, April 6, 2025, ten graduates from around the world gathered for the first MSDA reunion. Three of them showed up on the Ikebukuro campus, while seven from Africa, Central America, and Polynesia joined online (3 pm JST was the best starting time we could choose for everyone's convenience). Professor Kuramoto addressed a warm welcome-back message, and the former classmates shared their updates. Several alumni shared their achievements since returning home, including one Gambian graduate reporting his appointment as Senior Planner in the Office of the President, State House. We also found that a graduate in Mozambique is now employed by OCHA (UN), and a graduate in Honduras is working with UN Women. They also gave helpful advice on writing a thesis and job seeking to the current MSDA students who attended the meeting. The attendants created a video message for those who, unfortunately, missed this opportunity to reunite, and they promised to meet again next year.

New Students Joined the MSDA Course

The campus enrollment ceremony took place on September 19th, 2025, and the MSDA course welcomed sixteen new students. These students come from the United States, China, Indonesia, Myanmar, Nigeria, Russia, Taiwan, Thailand, and Ukraine.

Special International Students from Indonesia

Seven students from Sriwijaya University enrolled for the fall semester in 2025. They received scholarships from the Indonesian government and local authorities in the Ogan region and began studying with other MSDA students from diverse nations.

研究科のイベント案内

進学相談会は6～7月、10 ～ 11月の2回。その他公開講演会を年に数回実施しています。詳細は研究科公式サイトでお知らせします。

入学試験概略〈2026年度入試(2026年4月1日入学者対象)〉

博士課程前期課程

■入学定員　50 名
■入学試験実施時期　秋季と春季の２回
■対象　出願資格を有する者、もしくは本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者。
（注）後者の出願資格を得るためには、出願に先立ち、出願資格審査を受ける必要があります。
■選考方法　書類審査、筆記試験、口頭試問の成績を総合的に評価して行います。
※入試日程や試験区分は公開される入試要項をご覧ください。入試要項は６月上旬頃（秋季実施分）と 11 月上旬頃（春季実施分）に公開されます。

博士課程後期課程

■入学定員　５名
■入学試験実施時期　春季のみ
■その他　出願資格は前期課程と異なりますので、入試要項に掲載される内容をよくお読みください。
※入試要項は 11 月上旬頃に公開されます。

前期課程・後期課程とも、詳細は研究科公式サイトでご確認ください。

研究科・入試に関するお問い合わせ

立教大学独立研究科事務室　cde-ad@rikkyo.ac.jp

発　行／立教大学大学院
社会デザイン研究科
発行人／長 有紀枝
編集担当／川本 彩花
発行日／2025年11月10日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報を研究科公式サイトでお知らせしています。

社会デザイン研究科公式サイト
https://sds.rikkyo.ac.jp/

社会デザイン研究科 X
https://x.com/rikkyo_sds